



「美しい」と「なるほど」の間に…

成瀬 徹

レンガ色のタータントラックを走り抜けていく走者や雨上がりの路上をひたひたと駆け抜けていくマラソンランナーの姿に何とも言えない美しさを感じてしまうことがある。一切の無駄を削ぎ落とした彼らの走りにそれが「競走」であることを忘れてしまう瞬間がある。順位もタイムもその美しさに隠れてしまうのだ。

しかし、それは私個人が感じているものであって実体は闇の中にある。

絵画などの芸術作品においては、その作品の好き嫌いはともかく、多くの人々が「美しさ」を実感しているのは事実であり、作品のテーマがデッサンや色彩、構図やタッチなどとともにさまざまな技法によって表現されている。そうした「分析」とともに作品の時代背景や作家の生きざまなどが「解説」・「評論」されている。

時には言葉もなく、その作品を前にして、ただ立ちすくむしかないような感動は、このような「解説」や「評論」によって“なるほど”という思いに転化していく。その中身が深まれば深まるほど“なるほど”は深い感動を伴って静かにひとり一人の内にかげがえのないものとして沈殿していく。こうして芸術作品は個人だけでなく人類にとってかけがえのない

共有財産として保護され、継承されていく。

走るという行為には空気抵抗や引力に抗して前へ進むという運動の合理性や合目的性への究極的な追求と、「競走」という他者との駆け引き（＝戦術）や自己との葛藤—酸素負債能力や酸素摂取能力と心肺機能との折り合いなど—がその背景に存在するのだろう。

そこに人が走るという行為の意味や重さがある。そのことと切り離された「順位」も「タイム」もむなしい数字に過ぎない。それがわかったとき、「美しい走りは」ベールを脱ぐ。

詩人は「競走」をこう表現した。^(注)

「競走」
あなたは不思議だ
あなたの胸のナンバーは
すばやく空間を行きすぎた
お一枚の白い速力だつた

だが いまあなたは
笑つて僕と握手する
あなたにはもう速力がなく
言葉は^{ども}吃り
思想のタオルを肩から垂らしてゐる

(注)「体操詩集」(村野四郎)日本図書センター発行 *初版本は1939年刊行

(なるせ とおる／愛知支部)